

きみてらす

劇団セカイ 第二回公演

水
上
下
波

YOTAYU
AMPLIFIER

ブザーが鳴って照明が落ちると、波が引いていくようにざわめきが小さくなる。BGMを徐々に絞っていく。それに合わせておしゃべりをしていた人も口を噤む。

演目が始まる直前の、短い暗転。やがて場内を包むのは、完全な無音。

私は、この時間が好きだった。

皆が私の合図を待っている。いま、この世界を支配しているのは、他の誰でもない、私。私の指先から始まる。

スイッチを押して、

さあ、幕が上がる――

「はい注目ー！」

鏡子さんの掛け声に、バラバラに雑談していた団員の視線が一斉に集まる。私は壁際にひとり、座って休んでいるところだった。

「夏に新しく公演をやろうと思っっています！」

鏡子さんがそう言ったのは、二月の半ば、定期練習あとのミーティングでのことだった。

劇団セカイは人数も少なく、活動自体もそんなに活発じゃないから、公演をやるのは半年から一年に一度くらい。私が入団してからは初めてのことだ。

「実はこの前、新しく団員にしたいなーっていう子を見つけたんだけど、その子の勧誘も兼ねて公演をしようと思ってるんだよね。みんな、どうかな？」

みんなの反応はさまざまだった。ガッツポーズをしながら喜びの歓声を上げる人もいれば、不安そうに隣の人と顔を見合わせている人たちもいる。セカイでも一番の古株で鏡子さんの次に演技が上手いミカさんは、さっきまでとは打って変わって急に真剣な表情を浮かべている。私はといえば、どうしたらいいか分からずに、そっと息を呑んだ。

周囲を軽く見回した後、鏡子さんは満足げに小さくうなずいた。それ自体がなんだか演技っぽく見えたのは、さっきまでの稽古の空気がまだ残っていたからかもしれない。

「えー、それでんですけど、今回はいつもと違ってオリジナル脚本でいくことにします。せっかくだから今までやってなかった新しいことにチャレンジしたいと思って」

これには圧倒的に困惑の声のほうが多かった。これまでの公演の脚本をみたことがあるけれど、今までは既成脚本をそのまま演るか、潤色という、既成脚本に少し手を加えたようなものばかりだったから。

鏡子さんが脚本を書くんだろうか、と考えていたら、鏡子さんはさらに衝撃的な言葉を放った。

「今回の本は、ヒカリに書いてもらおうと思ってます」

「えっ……!?!」

鏡子さんはいつのまにか私を見つめていた。それまで黙って話を聞いていた皆から、かすかなざわめき声があがった。「どうしてヒカリが？」と誰かが言うのが聞こえた。

「ヒカリ、どう？」

視線が一斉に集まってきて、私は恥ずかしさに顔を伏せた。

「私、無理です」

「どうして？」

「だって、……脚本なんて、書いたことないです」

「誰だって最初は書いたこと無いでしょ。わたしだって初めて舞台に立ったときは絶対無

理って思ってたけどなんかなくなったよ」

それはきつと、鏡子さんが特別だからなのだと思った。

「そもそもヒカリって、書けるの？　なんか経験者だったりする？」

そう言ったのはミカさんだ。値踏みするような視線を感じて、私は慌てて首を振った。困惑混じりの小さく乾いた笑い声が周りから聴こえてくる。頬が熱くなる。

「わたしはヒカリになら出来るって思うな。ちょっと小説書いてたことあるって、前に言ってたでしょ？」

「……」

あんなのはただの趣味で、誰かに見せたこともない。ただの恥ずかしい妄想なのに。

「もちろんわたしもサポートするし。騙されたと思ってさ、やってみない？」

鏡子さんはいま、どんな表情をしているのだろうか。顔を上げられないから、答えを見ることはできない。自分に不釣り合いな役割を与えられることが怖かった。けれどそれ以上に、鏡子さんに期待外れだと思われることが怖かった。鼻の奥がツンと痛んだ。

「とにかく、ヒカリ、そういうことでオッケー？　まずは試しにでいいから挑戦してみよう！」

かろうじてうなずくと、それで話は終わりだった。鏡子さんの「解散！」という掛け声があつて、張り詰めていた場の緊張が一気に消えていった。

ミカさんは取り巻きを何人かつれて出て行ってしまった。他にも、この後どこに飲みに行くかを話している子たちもいる。私は、周りの何うような視線から逃げるように、ひとりですのまま帰路についた。

3

劇団セカイのミーティングはいつも短い。なぜなら、ほとんどの議題は鏡子さんが決めてしまうから。

鏡子さんが四年前に立ち上げたこの劇団は、今いる十人弱のメンバーのほとんどが元々演劇なんて未経験のひとたちばかり。しかもそんなひとたちは、みんな鏡子さんに憧れて入団しているから、鏡子さん頼りになってしまうのは自然なことではある。

隔週で毎月二回、土曜日のお昼過ぎから夕方まで。それがセカイの定期練習日。公演が近くなると、これが毎週になって、三日に一度になったりするらしい。

そんな練習日の終わりには、毎回ミーティングの時間が設けられている。

といってもミーティングで話し合うことなんて、元々そんなにない。公演の予定でも無ければ次回の練習日と内容の確認くらいで、その後は適当にだべって解散、というのがいつもの流れ。というよりも、雑談してる時間のほうがよっぽど長い。

このセカイをあんまり堅苦しくしたくない、というのが鏡子さんの考えらしい。それよりも、皆で仲良く和気あいあいとできたら良いよね、という感じ。私もそういうところは、居心地がよくて気に入っている。

だから、今日みたいにミーティングが延長するなんて、とても珍しい。少なくとも、私がセカイに入団してから初めてだと思う。もちろんそれは私が反対意見を言ったからなんだけれど。

帰り道の電車に揺られながら、私はぼんやりと今日のミーティングのことを考えていた。けれど混み合った車内はざわついていて、上手く考えがまとまらない。

窓の外、流れる風景を眺めながら、私は思考を整理しようとしていた。どうして鏡子さんは私に脚本を書かせようとするのだろう。私にできるんだろうか。今からでも断ったほうがいいんじゃないか。でもいまさら断るのは、あの場で拒否するよりもっと勇気が必要な事態になりそうだ。

お尻のポケットに入れていたスマホが震えた。専門学校の同期のさっちゃんからのメールだった。

『来週提出のレポート、もう終わった？』

時間を見るともう二十二時過ぎ。稽古が終わった後にやるつもりだったけれど、今日は予想外に長引いたから。

『明日やる』

短く返信して、思考ごと先延ばしすることにした。

Y O T A Y U

AMPLIFIER